

守られる暮らしから守る暮らしへ―

松前の防災力

東日本の広い範囲に

甚大な被害をもたらした東日本大震災は

地震災害の常識を大きく覆しました。

被災地だけでなく

日本中に大きな影響を及ぼした

大震災を目の当たりにした今こそ、

松前の防災力を

見つめ直さなければならぬ時です。

大規模災害に備えるために

今、一人一人がすべきことを考えます。



守られた命 救われた心

2万4千人もの死者・行方不明者を出した東日本大震災。「想定外」と言われる中で、「想定や訓練」が生きたケースもあります。まずは、日頃から高い意識で備え、助かった2人のエピソードを、岩手県藤沢町と岩手県田野畑村の協力を得て紹介。

佐藤ぶく子さん(58) ―宮城県南三陸町で被災

日頃の訓練を生かし 支援し合った避難生活

私の自宅は南三陸町歌津の伊里前湾から内陸に2キロほど入った川沿いの地区です。

大きな揺れが収まった後、近所に声を掛けながら避難所の西光寺に避難しました。その直後、幅12メートル、深さ8メートルの川を、高さ20メートルくらいの大津波が逆流。自宅も集落も一気に流されました。亡くなったのは8人も離れたところでした。

私たちの地区「寺前グ



ループ」は、12日に防災

組織の会議を予定していましたが、その矢先の大地震。主人は地震直後、高齢者世帯の安否確認に行き、車いすの高齢者を軽トラクに乗せて避難したところへ津波が。間一髪で逃れました。

それからは近所の施設で100人ほどの避難所生活が始まりました。電気は発電機、ガスはプロパン、水は沢水を利用。日頃の訓練のおかげでみんなで臨機応変に対応。

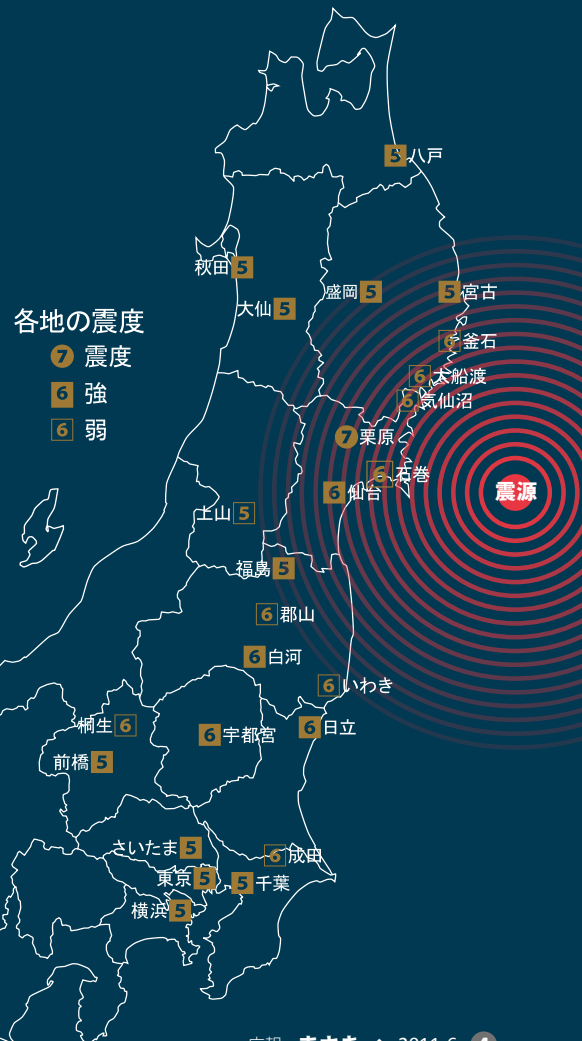


早野一弘さん(64) ―岩手県田野畑村で被災 「まさか」を捨てる この教訓を伝えていく

「いづがは来つと思っ

てだったども、まさかここまで……」

なぎが良い3月11日。午前中に採ったシウワリ貝を誰に配ろうか考えていた矢先の地震でした。かつて経験したことのない激しく長い揺れ。直感的に「来ると思いました。揺れが収まり、海を見ました。普段の干潮より多くの潮が引き、やがて満潮のように。鳴門海峡のような渦を巻いた後、海面がどんどん高くなり



ました。岸壁のクレーンは押し倒され、船は沈んだり、ひっくり返ったりしました。その波が引かないうちに「ドーン」と第2波が来ました。真っ白く上がるしぶきの下から、すごい勢いで押し寄せる津波。自分がいた場所よりも高く感じ、「逃げろー。駄目だ、もっと上だ、上がれ、上がれ」と、叫びながら逃げました。逃げる途中、家に居た妻、娘や孫が気になりましたが、見ている時間は

災害と向き合い 不安と共に生きる

甚大な被害をもたらした東日本大震災。

私たちの地域にも

明日発生してもおかしくない「南海地震」がある。

30年以内の発生確率は60%。

しかも、南海トラフの震源は東日本より陸に近い。

津波が襲来する時間は―

生き延びることはできるのか―

支援隊の2人が感じる 「今、必要なこと」

平成23年3月11日14時46分。三陸沖の深さ約24キロで発生したマグニチュード9.0の大地震。建造物の倒壊、地すべり、液状化などの直接的な被害のほか、津波、火災、福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質漏れや大規模停電など、広域に甚大な被害をもたらしました。

地震発生後、県は緊急消防援助隊112人を被災地に派

松前消防署 中矢邦彦士長

大規模災害の場合には、行政や消防の力でさえ、あてにならないかもしれません。「自分の命は自分で守る」。できる訓練、できる準備をしてください。

松前消防署 小寺能康消防士

自然災害の発生を防ぐことはできなくても、被害を軽減することはできます。何事も日頃の小さな準備の積み重ね。今、できることを実行してください。

30年以内の発生確率 60%の南海地震の脅威

四国沖を震源とする南海地震。国の地震調査委員会の発表によると、今後30年以内に

南海地震発生時の被害想定 (発生時刻午前2時の場合)

死者数	115
負傷者数	重傷者 16
	中軽傷者 1,160
避難所人口	1日後 9,848
	1週間後 11,101
建物被害棟数	全壊棟数 2,553
	半壊棟数 4,502

発生する確率は60%、50年以内では90%の確率で発生し、その規模はマグニチュード8.4前後と推定されています。南海地震は、東南海地震と同時に発生する可能性も指摘されていて、その場合、松前町では震度6弱、発生から2時間で第一波の津波が来ると言われています。県が平成14年に発表した市町別の被害想定では、町内の死者は115人、負傷者は1176人、全壊する建物は2553棟、半壊は4502棟に及びます。

高い確率で発生が予想されている南海地震。それは、明日かもしれないし、今日かもしれない。発生まで、私たちは、災害と向き合い、不安と共に生きなければならないのです。



毎年訓練を実施 参加が少ないのが悩み

災害に強い地域をつくるには、一人一人が「自分たちのこと」としてとらえ、行動することが必要です。西高柳自主防災会は、防災マップを作成したり、自主防広報を発行したり、自主防についての講座を開催したりして、日頃から住民の防災意識を高められるよう手掛けています。訓練は、防災士を中心にプランを考え、運動会のプログラムの一つに。300人ほどが参加していますが、まだまだ地域全体ではありません。特に若い世代も含めての参加が少ないのが悩みです。住民の意識を高め、「自助」「共助」のできる地域づくりを進めたいです。



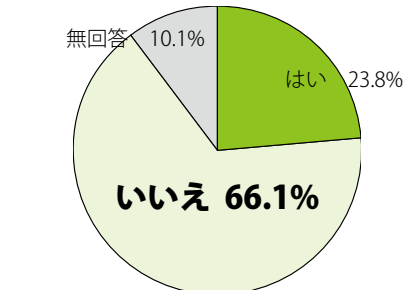
地域防災力に関するアンケート

愛媛大学防災情報研究センターと松前町は、町の地域防災力を測定するため、皆さんの知識や意識を調査
調査期間は平成23年1月。調査対象は松前小学校の保護者。回答者数は543人。

【性別】 男性 14.4% 女性 85.6%
【年代】 20代3.5% 30代53.5% 40代38.7% 50代3.0% 60代以上0.9% 無回答 0.4%

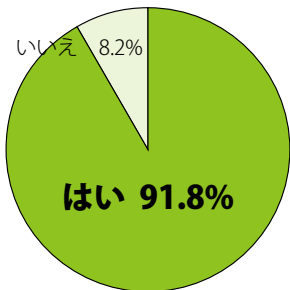
地域防災に対する意見

自主防災組織は大規模災害が発生した時に有効に活動できる？

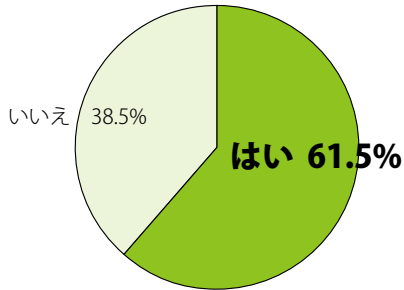


※「いいえ」の中には「わからない」も含まれます。

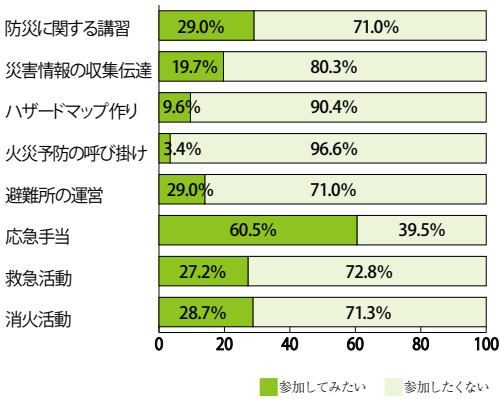
自主防災組織は必要？



自主防災組織と共に地域の防災活動に関わってみたい？



自主防災組織の活動で参加してみたいのは？



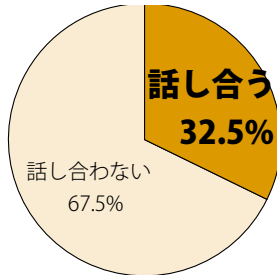
松前の防災力、これが精一杯か

迫りくる南海地震に対して、松前町の防災対策はどうなっているのか。

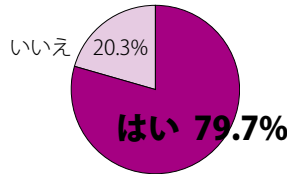
「家庭」「地域」「行政」それぞれの取り組みの実情を探る。

家庭での防災対策

地震が起きた時を想定して家族で避難の方法を話し合う？



あなたの地域の指定避難場所を知ってる？

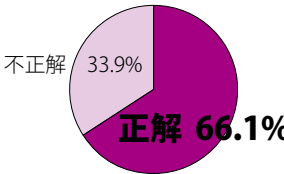


▶指定避難場所

松前小学校、松前中学校、北伊予小学校、北伊予中学校、岡田小学校、伊予高校、健康増進センター・町民グランド、松前公園

防災に対する知識

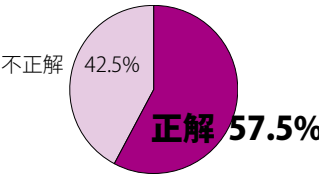
大震災による死者の約8割の原因は？



答え 家具の倒壊、建物の下敷き

過去の大震災の死者のうち、約8割が窒息・圧死によるものと言われています。

災害時の伝言ダイヤルは？

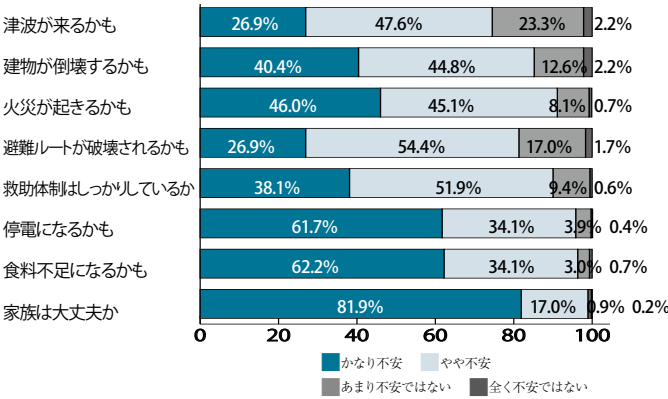


答え 171

被災地内の家族、親戚、知人などへ安否確認や緊急連絡をとれるようにする「災害用伝言ダイヤル」は171です。

災害に対する意識

東南海・南海地震のような大地震が発生したとしたら不安は？



知識はあるけれど 不十分な家庭の防災対策

防災に対する知識を調査した結果を見ると、半数以上の人が正解でした。指定避難場所を知っていたのは79.7%です。家庭での防災対策については、家族で避難方法を話し合うのは32.5%。3家族に1家族しか話し合いができていないことになります。このほか、家具の固定、非常持ち出し袋の準備、非常食の準備

高い確率で発生が予想されている南海地震と向き合い、不安と共に生きなければならぬ松前町。その準備はできているのでしょうか。

結成率100%の 自主防災組織の実現

「自分たちの地域は自分たちで守る」という自覚、連帯感に基づき自主的に結成する「自主防災組織」。本町は、平成17年度を防災元年と位置づけ、自治会など地域コミュニティを単位とした自主防災組織づくりを進めてきました。平成17年の西古泉をかわきりに結成が進み、23年1月には、大間地区自主防災組織が結成され、結成率は100%に。現在、町内全ての地域に自主防災組織があります。

町は、結成された自主防災組織の活動を支援するため、防災士養成講座を実施するなど、防災リーダーの育成に努めて

きました。各組織には活動に必要な防災資機材の貸与も行いました。各防災組織は、この防災士を中心に避難訓練、応急救護訓練、炊き出し訓練などを実施し、万への備えを強化。住民同士の連帯感も築いています。

しかし、防災に関する意見を調査した結果では、自主防災組織についてはほとんどの人が必要だと感じているものの、66.1%の人が「現在の自主防災組織は大規模災害が発生した時に有効な活動ができない」と思っています。その理由としては、▽組織自体がよくわからない▽訓練・準備不足▽パニックになり大規模災害時には機能できないと思う▽高齢者と子どもが多くて連携が難しい▽若い人の参加が少ないなどです。

実際、多くの自主防災組織からも若い人に参加してほしいという声を聞きます。しかし、日中災害が発生した場合には、若い人は仕事でいませ

ん。必要なのは、災害時、どんな状況にも対応できるような訓練。何度も繰り返し返すことで「備え」を身に付ける必要があります。

しかし、訓練は回数を重ねるごとに緊張感がなくなり、マンネリ化していくものです。毎年9月の第1日曜日に町が行っている「松前町総合防災訓練」も、自主防災組織、消防団などの防災関係機関、地域住民との協力体制をつくり、防災意識を高めています。自主防災組織ごとの想定内での訓練しかできていませんでした。

そして何より、訓練は町全体で必要です。自主防災組織の活動について聞いたアンケートでは、ほとんどの項目で「参加したくない」という人のほうが多い結果でした。

もちろんこれは限られた範囲でのアンケート結果ですが、関わっている人と関わっていない人の差があることは確かです。

大震災の教訓、生かすことが使命

前触れもなく突然やってくる大地震は恐怖としか言いようがない。近い将来、高い確率で発生が予測されている南海地震に備え、東日本大震災の教訓を生かすことが重要だ。

災害時に機能する自主防災組織の日常付き合いの濃さがカギ握る

《先進地リポート》●岩手県藤沢町の取り組み

8年も前から、今回の東日本大震災に備えてきた町がある。震度6弱の激しい揺れにも犠牲者を出さなかった岩手県藤沢町だ。機動力抜群の自主防災組織は、自分たちの地域を守るだけでなく、甚大な被害を受けた沿岸部の支援活動まで行っている。



第24自治会防災訓練で救助訓練を行う自治会員

藤沢町第24区自治会 千葉ひろあき会長、100世帯

17年4月、自治会に自主防災組織(総務部防災部)を設置。以来、訓練なくして組織は機能しないをモットーに、避難訓練、消火訓練、救命講習会、救助訓練、炊き出し訓練、図上訓練などの訓練とこれらを総合的に実践する災害想定訓練を徹底的に実施してきた。東日本大震災では、自治会員の安全確保は言うまでもなく、いち早く自治会内の被害状況を独自に調査して「被害状況マップ」を作成。さらに、大津波で壊滅的な被害を受けた宮城県気仙沼市や南三陸町に出向き、継続的な被災地支援活動をしている。藤沢町が全国に誇れる自主防災組織である。

この震災を想定し繰り返ししてきた訓練

東日本大震災で余震を含め震度6弱を3度観測した岩手県藤沢町。第24区自治会は藤沢町はもとより東北地方を代表する自主防災組織だ。同自治会は平成17年に自主防災組織を設置。以来、今回の災害を想定した各種訓練を何度も行ってきた。リアルな訓練は常備消防並み。避難所に集まった人を見て、「あなたは救助係」「あなたは炊き出し係」と役割を決める。炊き出しのメニューも、その日の天候、時刻、人数などを把握してから決める。つまり、全てがシナリオのない現在進行形だ。

同自治会防災リーダー佐藤幸生さんは「災害時に誰がいるかなんてわからない。何の役割を与えられても対応できる、それが大前提。うちでは全員が心肺蘇生法をできる」と胸を張る。

東日本大震災では電気、ガス、水道、電話など全てのライフラインが寸断された。地震発生後、自主防災は地域の一人暮らしや高齢者世帯を全

て回って安否を確認。家屋が損壊したり、不安におびえたりする人たちを避難所へ誘導。だが、避難所は強い揺れで損壊しており、想定外の対応を迫られた。

「外は雪。そこで隣家のビニールハウスを借りた。自宅から暖房器具や毛布を持ち込み、みんなで一晩過ごした」翌日からは地域のコミュニティセンターに避難所を開設。電気が復旧するまで発電機と投光器で明かりをとり、米や野菜を持ち寄って食事を提供した。

同時広域的に発生する大規模災害では、消防や行政の支援の手が届くまでに数日はかかる。それまでは自力で生き延びるしかない。藤沢町は同自治会だけでなく、町内に41ある自主防災組織が行政に代わって住民の安否確認や避難誘導を行った。

「自主防災は組織することが目的ではない。大事なことは、災害時に確実に機能するかどうかだ」と佐藤さん。その前提として、「日頃から隣近所や地域との信頼関係を築き、地域の和をつくることが大事」とアドバイスする。

震度6弱の激しい揺れにも人的被害を出さなかった藤沢町。その根本には、15年5月に発生した三陸南地震の教訓があります。

三陸南地震で大きな被害を受けた藤沢町は、地震直後から町内各地で自主防災組織の結成が始まりました。30年以内の発生確率が99%といわれる宮城県沖を震源とする大地震に備えるためです。同町は町内43の集落ごとに防災リーダーを育成し、自治会に自主防災組織の設置を促しました。現在自主防災の結成率は95・3%。各自自主防は、災害想定訓練、救命講習会などを開いて万への備えを強化し、災害時の対応を確認してきました。今回の大地震でも自主防の活躍と住民一人一人の冷静な行動により、一人の犠牲者も出さずに済みました。プロローグで紹介した2人もまた、日頃からの高い意識を持ち、備えや訓練を重ねてきた人たちです。今、私たちがすべきことは、この大震災の教訓を生かし、行動することです。南海地震へ備えることです。

いよいよ動き出した松前町の自主防災組織



Interview

西村榮造さん
松前町区長兼会長
大浦区長

自主防災組織の充実と認識を高揚させたい

東日本大震災は対岸の火事ではありません。あらためて「自分たちの命を守る対策は、自分たちがやらなければならない」と感じています。大地震など同時に、広域的に発生する大規模災害の場合、隣接する自主防災組織との相互連携が被害拡大をくい止めたり、二次災害を防いだりするカギを握っています。現在、町内各地に自主防災組織が設置され、それぞれ活動していますが、これらを一本にまとめたり、束ねたりする全町的な組織をつくらなければならないと思っています。来るべき南海地震に備え、地区を越えて情報を交換したり、互いに連携したりしながら、松前町の防災力を向上させていくことが急務です。

各地区の区長で構成する統括広報委員会は4月14、15の両日、自主防災連合会の取り組みを学ぶために徳島県鳴門市を訪問しました。これは「自主防災組織をテーマにした防災研修を受けたい」という区長の要望を受け行われたもので、21人の区長が同市を訪れました。

西村区長会長は「研修で感じたことは『自らやらなければならない』ということ」ときっぱり。「東日本大震災では、町役場や消防署も津波にのみこまれ、行政や消防が機能しない自治体もあった。年一回の総合防災訓練は町主催。町から言われて参加する自主防では命を守ることもなどできない。私たちが自ら地域に呼び掛けるようになればならないと感じる。それが『自主防災』。いずれは各地域の組織を束ねる連合会をつくり、南海地震に備えたい」と意欲を見せます。

5月4日には、四国電力伊方原子力発電所を視察。地域の防災意識は日々高まりを見せています。



徳島県鳴門市での研修の翌日、兵庫県淡路市を訪問した統括広報委員

第24区自治会防災リーダー 佐藤幸生さん

昭和53年藤沢町生まれ。04年に町自治会協議会が主催した地域防災リーダー養成研修を終了し、第24区の防災リーダーに。一関市消防本部消防長から消防・防災セミナー指導者の認定を受け、地域防災活動の中心的役割を担っている。



岩手県藤沢町。北上山地の南端、宮城県境に位置する。面積123.15k㎡、人口9,134人。基幹産業は農業。町内43集落のうち41集落で自主防災組織を設置。結成率は95.3%に上る。

それでも松前町で 生きていくために

地域は自主防災組織を結成した。連合会結成に向けた動きもある。だが、組織は機能しなければ意味がない。

災害発生時、組織リーダーが松前にいるとは限らないし、役場も機能を失うかもしれない。

想定外を乗り越えるために、私たち一人一人がやらなければならないことがある。

会社を経営する田中宏樹さんは、妻麻紀さん、長男優寛くんと3人暮らし。隣地には宏樹さんの両親が住んでいます。「防災はまず家庭から」と言う宏樹さん。機会あるたびに麻紀さんと優寛くんと万一の行動を確認し合います。

「人間が最も無防備なのはたぶん家にいるときです。寝ているかもしれない。靴はもちろん脱いでいます」

そんな中で大地震が起きれば、家具や家電は凶器になる。まずは家中を点検し▽家具や家電は固定する▽廊下や階段には物を置かない▽地盤が弱ければ補強する―など「安全な家づくりを心掛けることが大事」と宏樹さん。麻紀さんは「リフォームの際、大工さんと相談して家具を固定しました。これからは部屋の様式替えをし

ながら、家族みんなでアイデアを出し合って家具や家電を固定したいです。防災対策は暮らしに欠かせない家事と一緒にしています。

自宅の隣には両親が暮らしています。宏樹さんは、日中仕事で自宅にいません。麻紀さんは、優寛くんの下校までには仕事を終え帰宅するようにしていますが、間に合わないことも。そんな時、下校した優寛くんは大好きな祖父母と過ごすと言います。

「ここが家。大きな地震が起きた時は、まず身の安全を確保する。揺れが収まったら、おじいちゃんとおばあちゃんと一緒に避難所の北伊予小学校へ行くんだよ。お父さんとお母さんも向かう。集合場所は鉄棒前にしよう」と説明する宏樹さんに「うんうん」とうなずきながら、マップに見入る優寛

くん。

「子どもは大きな災害を経験したことがあります。だからこそ、教えないといけないと思います」と麻紀さん。3月11日に発生した東日本大震災の様子はテレビで見ました。「激しい揺れ、大津波、そして原発事故。目を覆いたくなるような被害に心が痛みました。南海地震の発生が予測されている松前も対岸の火事じゃありません」。

「災害は忘れた頃にやってくる」と言われます。災害の記憶、つまり被災体験はそれだけ風化しやすい。震災直後は日本中が高い防災意識を持って暮らしています。けれど、その意識は時間とともに薄れていきます。まして数十年、数百年に一度の巨大地震ともなれば、風化の速度も速い。だからこそ日頃から万が一備える「忘災対策」が重要です。被災体験のない子どもたちには、家族が責任を持つて過去の災害を伝え、災害時の行動を教える必要があります。

「大地震は防ぐことができません。だとすれば、大事なことは起きた後にどう行動するかだと思います」と宏樹さん。「二次災害を防ぐために、冷静な行動が大事だと思います」と麻紀さん。

ライフラインが寸断されて電気がつかない、水が出ない、電話がつ

ながらなくなれば、多くの人がおろおろしてしまいます。突然発生する災害に人は多かれ少なかれパニックに陥ります。平常時に百のことを総合的に判断できても、同時に予期せぬことが次々と発生する緊急時には、平常時の何分の一かの判断力しか保てないことは過去のさまざまな緊急対応事例を見ても明らかです。

同時広域的に発生する大きな災害では、行政や消防など支援の手が届くまで時間がかかります。それまでは、自力で生き延びるしかありません。生きること、生き抜くこと、そのために備えがあり、訓練があります。まずは、家庭、職場や地域で災害時の備えを考えたり、災害時の行動を確認したりする「防災会議」を定期的に開きましょう。大地震を想定したりアルな訓練を繰り返し実施しましょう。こうした地道な備えがあつてこそ防災体制は機能します。

まずは、自分の身は自分で守れる家庭をつくり、次に互いに支え合い、助け合える向こう三軒両隣の関係を築きましょう。そして、いざという時に確実に機能する自主防災組織を再構築しましょう。行政や消防に守られる暮らしから、自分で守る暮らしへと変えていくことが大事です。

家族で、地域で伝えたい 「忘災」の心

家族防災会議をしました

田中宏樹さん 麻紀さん 優寛くん

たなかひろき・まき・まさひろ



家族3人でもしもの時どうするか話しあいました。災害発生時にも家族が合流できるよう、集まるのは北伊予小学校の鉄棒前と決めました。決めて終わりじゃなくて、確認の意味も込めて繰り返し話しています。

INTERVIEW

家電や家具を固定します

横林香子さん さつきちゃん

よこばやしきょうこ・さつき



震災前にテレビを購入しました。電気屋さんに「固定しますか」と言われたのに、あと1年で引越すからと断ってしまいました。でも、1年以内に地震が来ることだってあると反省。家電や家具を固定する予定です。

非常持ち出し品を準備しました

神野京子さん 小雪ちゃん

じんのかょうこ・こゆき



東日本大震災後、いざというとき必要なものを持ち出せるようにまとめました。避難生活になるかもしれないし、物資がないかもしれない。自家発電できる電池と、長男が技術の時間に製作した自家発電式ラジオを入れています。

INTERVIEW

安全な避難場所はどこか考えました

武井志摩子さん 七香ちゃん 心那ちゃん

たけいしまこ・ななか・ここな



ニュースで津波の恐ろしさを知りました。松前校区なので津波が心配になり、家族でどこが本当に安全な避難場所なのか話し合いました。停電時に自動点灯し、常夜灯にもなる防災用のLEDライトをリビングに置いています。